

日本平付近の農業土地利用とその環境

山崎 幸江

1 研究の目的

静岡県赤石山地南縁部に交錯する洪積丘陵・台地・平野のうち、ドーム頂307mの日本平（有度山）は、台地としては牧ノ原と並び日本で最も高いものの1つである。その日本平付近における農業土地利用を取り上げ、それを規定する環境諸条件（特に自然環境）との関連を探ることにより、地域の問題点まで考察することを試みた。

2 研究の方法

まず地形図、空中写真、既存資料等から地域の概要をつかんだ上で地域区分をした。次に各地域の農業の現況を歴史と統計から知ると共に、自然環境については現地での土壌サンプリング及び室内分析を行ない、考察に加えた。論文の構成は第I章から順に調査対象地域の概観、自然環境、農業土地利用状況としたが、土壌分析の結果は第II章では述べず、第IV章の地域の問題点の中で地の事柄とともに扱うものとした。

3 研究の結果

有度山は静岡県中部、静岡市東南部と清水市西南部にまたがり、その特異な姿のため、早くから注目されてきた。その結果更新統の4層が北側に傾いて重なり、ドーム状構造をもつ丘陵であることが明らかにされた。そしてその地形的特徴により、大方南麓・東麓・西北～西麓の3つに区別されるが、気候的にも、南面する駿河湾、冬の北西季節風の影響によりそれらは全く異なる様相を呈する。従ってそこで営まれる農業にもそれぞれ独特なものが見られる。

①南麓・久能海岸地域＝園芸作物中心地域

駿河湾と北風を遮る有度山にはさまれた、非常に温暖な準無霜地域である。明治初期までは半農半漁であったが、中期に苺が導入されて以来、地形的・気候的特徴をうまく生かした石垣促成栽培

が広まった。現在も苺を始めとする園芸作物が中心で、観光苺も行われている。急斜面での苺栽培には、斜面の崩壊・労力等の面で不利な点はあるが、普通の耕作が不可能な所を最大限に利用している点特徴的である。近年は自然環境の克服よりも人文環境、特に産地の競合と地域の停滞が問題となり、転換期にきている。

②東麓・清水地域＝柑橘栽培中心地域

明治の山林原野開拓ブームの中で、近接地域での温州みかんの導入と共に柑橘栽培が始まった。しかし海食崖の斜面は比較的急な上礫質であるため侵食が激しく、段畑にして土止め（植物、土のう）をする等によりそれに対処してきた。この土壌侵食を具体的な数値で実証すべく分析を行なったのであるが、中心であった腐植含有率からは、1つのサンプルを除いて有意と思われる結果は得られなかった。尚、近年はみかん不況とも言える状況下であり、改植を伴った大規模な地形改造も行われ、自然・社会両条件の弱点を一度に克服すべく努力がなされている。

③西北～西麓・東豊田（大谷）地域＝茶栽培中心地域

緩傾斜地に茶が栽培されている。茶は土族授産事業以来のもので、第二次大戦中は一時的に減ったが、茶の不況時にも転作されることがなく中心作物となっている。分布が黒ボク土（非火山灰性）とほぼ一致するため当初何らかの関連があると思われたが、黒ボク土を選択しているのではないことが明らかになった。むしろ茶には適さず、施肥・排水路等で克服しての茶栽培である。また、市街化が進み耕地の減少が著しく、有度山斜面の農業上の有効利用と市街化の中での農業の存続が今後の大きな問題となっている。